



# 中距離戀愛



凜音

「じゃあ、お休み。」

彼がそう云って、通話が切れた。

先ほどまでモニターに映っていた彼の笑顔も一緒に消える。

……。

私は何だか空しい気持ちになって、ため息をついた。後から流れてくるのは、涙だけだった。

彼はこの少ない通話の時間でさえ、「話す機会が少ないから、惜しいんだ」と云ってくれた。その言葉に、普通の私と同年代の恋する女の子ならば喜びから微笑みが毀れるのだろうが、私から毀れてくるのは涙と嗚咽ばかりだった。しかも、何故だか分からないこの感情に、説明も理由もつけることが出来なかった。

しゃくりあげている私に理由も訊かず、まるで空気扱いする家族は無関心なのか、態とそうしているのか判らなかったが、兎に角今日に関しては有難かった。

涙を拭いて、取り敢えず冷たい珈琲を流し込むと、一旦部屋へ戻った。私は自分用のパソコンを持っていないので、リビングでしか彼と話すことしか出来なかったからだ。当然、非喫煙者の家族の集まるリビングでは禁煙。自室にしか灰皿はなかった。

細巻きのメンソールに火を点ける。最近、元彼に貰ったVivienneのライターは機嫌が悪い。

「あれも好き、これも好き、あれは嫌いこれは嫌い。」

「こうなりたい、こうしたい、ここ行きたい、でも出来ない。」

煙と一緒に独り言を吐き出す。リズムカルな愚痴ついでに韻を踏むと一人自嘲した。しかし、楽しい筈もなく。再びPCに触ろうかとも思ったが、やめておいた。

不調の原因は知れていた。彼も、友達も、ちゃんと仕事をしたり、学校に行ったり、それぞれ頑張っている。それを知ってからの焦燥感が根底にあることは解っていた。彼が忙しい時間を割いてまで私と話してくれたことも、それまで昼夜逆転で眠りこけていた私からすれば酷く有難く、酷く……こう云っては失礼だが私にとって惨めだった。

日付が変わり、夜勤明けの妹が帰ってきた。私はぼんやりと挨拶を交わすと、お風呂に入るべく準備を始めた。

## Blackjack

---

自分を歪めるのに疲れる反動で浪費するものだから、手許に残るものも残らない。その日のうちに紙幣を黒い服に、アルコールに、騒音に身を置く時間にすり替えて日々を凌いでいた。その一夜は相手に夢中なふりができる点では、私も含め誰もが詐欺師である。享樂的な世界は一見華やかに見えてどす黒い。ちやほやされるのも初めの内だけだと気がついた時には諦めしか残らないのだ。惰性と未練で現にしがみつく。

騒がしい時間が峠を越える頃に、どんよりとした空気の中、歌うのにも飽きてひそひそと話し込む。遮音性の高いカラオケ店の一室は、逆に静かだった。

「喉痛いねー……。明日休みだからいいけど、通勤に一時間もかかると電車で寝るしかない気がする。」

「よく一時間も電車乗ってられるよ。どちらかと言うとそれが凄い気がする。普通に反対ホームから電車乗って帰ってきたくない？」

「なるさー。そりゃ、なるよ。」

でもメールだと来る来る詐欺だしいつ来るかわかんないじゃん？と私が声のトーンをあげると、またか、と言う顔をされた。この友達は色々な意味で表情が豊かである。

「客じゃないのかーい。だから偶然会ったことにしといてコンビニでだけでもいちゃついてきたらそれで良かったんじゃない。」

「いや、それ個人的に凄く割り切れないから。無理無理惚れる。」

「既に割り切れてない気がするんだけど、」

と、黙って選曲をしていた友達が私の携帯を鞆から取って差し出した。

「盲目というか、難聴まで来たかい、」

「ごめん！電話！」

携帯を掠め取ると、呆れ顔の友達二人を尻目に私はさっさと部屋から出た。どちらかと言うと廊下の方が他の部屋で盛り上がっている声やら音やらで騒がしいのだが、電話は来る来る詐欺の相手だった。

「よ。何してた、」

「カラオケだよー。お仕事終わったの？お疲れ様。えー何、暇なの？」

「暇じゃなかったら電話しないなあ。」

彼は笑う。この間、過ぎてしまった彼の誕生日プレゼントがどうとかでもめたばかりだった。結局彼が私の泣き言を聞き入れて「お前からもらえるなら何でもうれしいよ、」と慰めに入ったことで私の無駄に高い自尊心は保たれた。仕事に行くついでに、路面店で彼が「これしか受け付けない」と云っていたヴィヴィアンの灰皿を購入してあった。スタンダードなシルバーと迷ったが、メールアドレスにフランス語で黒を混ぜ込んである彼のことなので、少し値は張ったが黒を選んだ。

営業時間外に会うことは基本的に私の所属している店は禁止だった。というか、どこでも大体

そうだという認識でいる。罰金が怖い、と会うのを拒んでいたが、物件探しをしていた地域がたまたま彼の実家のある地域だったため、最寄の駅で落ち合って、それからこっそり会っている。「ところでさ、今Y駅まで来れる？」

「何で？」

「俺さ、云ってたけど、引っ越して一人暮らし始めたんだよね。んで、今日引越し終わって一人暮らし初日なわけ。新居にお招きしようかなあって。来れば会えるよ？」

「ほんとに？えーでも、ばれないかなー……。」

「駅からは車だし大丈夫だって。お前のために待っててやってんだぞ、」

悪戯っぽく笑う。ずるい、と云って私は自分がさっきまでいた部屋のドアを開けた。

「済まぬ。僕を、家に寄ってから駅まで送ってはくれまいか、」

「……それはなんと言う冗談？」

二人分の冷たい笑顔が返ってきた。どちらかと言うと呆れている。

「ここ持つから！お願い！」

事情で車の運転ができない私は、携帯を持っていないほうの手を合わせるような仕種で今日のハンドルキーパーにお願いしてみる。悪びれもしなかったのはきっと、アルコールで脳内が水浸しだった所為だろう。

「仕方ないなあ……。」

「アリバイ工作も頼む！」

「最低だな、」

「うん。……ごめん、一時間待って、電車の都合上。」

にっこり笑って頷いた科白の後半は携帯の通話口に向かってである。呆れながらも早々に店を後にしてくれた友人の計らいで私は自宅に寄ってもらい、彼へのプレゼントと携帯用のスキンケアアセットを抱えて、ほぼ脱走するような形で地元駅を後にした。

イヤフォンの音量を鼓膜が割れんばかりに上げるのは電車に乗るときの私の癖だが、誰もいない車両で彼とメールしながら、少し羽目を外し過ぎてはいないか、と警告する理性を、鼻歌とともに駅のホームに置いて北口に降り立った。やっと見慣れた白いバンがパッシングする。

「おせーよ。」

「電車に文句云って。来てあげたのだから有難く思いなさい。」

「それも、俺の分？」

後ろ手に隠したつもりのショッパーを目ざとく見つけた彼が訊いてくる。

「スモールオーブと交換ならいいよ。」

「嘘吐けよ。シルバーのオーブかわいくないって言ってたの誰だ。……ありがと、」

そうって、私が乗り込むには少し高すぎるステップを軽く腕を掴んで引き上げる。そのまま、他の人だったら赦せないと云っていた顎鬚がちくっと刺さって軽く唇が重なった。

真っ暗で右も左もわからないような夜道を、それからしばらく黙って揺られた。彼は機嫌よくカーステレオに合わせて洋楽を口ずさんでいる。横顔を見ながら、時々合う視線に笑顔を返した。

「狭いけど、どうぞ。引越しのときに友達に手伝ってもらった以外は、人上げるのほんとにお前が初めて。」

「またまたー。」

まだダンボールも数のある、手狭だが、どこか秘密基地のような雰囲気のある部屋はダークトーンで揃えてあり、仕事で内装も担当する彼のセンスを感じさせた。

ぼんやりしていると何故か本名で呼ばれた。教えてあったので当然といえばそうなのだが、ほぼ連絡手段であるメールでも、気紛れでかかってくる電話でも「お前」呼ばわりされていたので、少し照れくさい。

「風呂沸いた。入るぞ、」

疲れたーと云いながら浴室の扉を開け放してシャワーを浴びようとするので、閉じがてら背中を流す係になった。Tシャツを借りてかぶる。

「なんかものすごいワカメちゃん丈なんだけど、」

「それが醍醐味だろ。」

おいで、と引き寄せられる。胡坐をかいた足の間にすっぽり座って背中からくるまれると、やっと安心した。そのままの姿勢でショッパーを指して開けていいかと尋ねてくる。そのために用意したよ、という、と、またくしゃつと髪を撫でられた。腕を伸ばしてショッパーを取り、開けてまた相好を崩す。私はなんだか照れくさくて、煙草を切らした、と言いつけをして置いてあった彼のラッキーストライクを勝手に吸った。

テレビは大きくないときがすまないから大きいのが買ったんだけど、結局置くところなくてベッドの下に置いた、と笑う彼は、番組が全て終わって画面が砂嵐になってもそのままにしている。

「消さないの、」

「なんか、この音好きなんだよな。海みたいじゃん？」

「家、すぐ近く海だから、天気荒れると海鳴り聞こえるよ。」

「そっか。……明日、家まで送るから、4時起きな。起きろよ、」

「そっちこそ、」

「お前、俺が早起き得意なの知ってるだろ。真面目に蟻のように働いてるからな、」

お休み、と頭を布団に押し付ける。酔いが回った私は浅い眠りを齧っただけで、結局4時に彼を起こす係となってしまった。

ゆっくり昇る太陽を背に高速を運転している彼は明らかにイラついていた。酔いもいい加減醒めれば、全てが白々しい。方向指示以外ほぼ無言で自宅まで送ると、さっさと帰ってしまう。

「……お仕事邪魔しちゃったかな、」

ぼつねんと一人、家の前で携帯を見つめる。ゆっくりと開いて、メールを送った。わざわざ家まで送ってくれてありがとう、お仕事頑張ってるね。そのメールに宛てた返信はずっと後になってから、「もう連絡してこないでほしい」というものだった。

それきり彼は店にも現れない。街で見かけることもなかった。最初こそ散らしたものの、仕事はやりやすくなった、と、嘯いてシフトを増やす。けれどもう、切り札どころか、私には何

も残っていなかった。最初から駆け引きにすらなっていなかったのだ。ひとつ特別を増やせば負ける。数字合わせのように見事な行方不明者と過ごした時間は幻のようだった。

## 8 hole

---

きっとあの告白も血迷ったものだったのだ。それは解りきっていたことで。

仕事の前に僕は女の子の自分を作っていた。そう云う職種だったから仕方がない。着替えは職場にて行すが、僕の降りる電車の時間に駅から直通で職場に行くのは時間が少し余る。珈琲を飲む序でに、仕事の時間が近い彼にメールして、僕等は時々会って、珈琲と煙草で時間を潰しながら他愛もない話をした。そんな、週に数日あるかないかのある日。

「あ、今日お揃い？」

何のことかと思ったら、彼は白いマーチンを履いていた。僕は自分の足元を見る。白に、少し汚れのついた8 holeのマーチン。

「本当だ、」

「俺、ホール多い分何か足短く見えない？」

彼は苦笑する。不意に、彼と偶然出会ったときの屈託のない笑顔が浮かんで視界が滲んだ。

携帯のアラームが鳴る。そろそろ僕は「あたし」になって行かなくてはならない。

彼の一番には、なれないのだ。解りきっていたことで、解りたくなかったこと。誰の一番であってもいけない。それは寂しさを埋める行為とかわりはないから。

「.....そろそろ、行かなきゃ。」

「頑張ってね、」

「お互いに、」

それ以来、彼とは会っていない。風の噂と雑誌でアパレル関係の仕事もしているようだと知ったが、所詮、憧憬でしかなかった。時々マーチンを履くと感傷的になる。

酷く暑い夏だった。初めての遠征先、否、出会っていただけかもしれない、二度目の遠征先。

過去に大阪に出向いた事はあった。しかし、彼とはまだ出逢っていなかったのだ。

「今回の武道館、行く？」

「うん、行く行く！やっと会えるねー！」

付き合う、という事になって初めて、やっとやっと会うことが出来る事になった。友達としての付き合いは、それよりずっと先からあったのだが、実際に会うのは初めてだ。しかし私は、ずっと彼のことが好きだった。

「樹の一番になりたい。」

ずっと言い続けていた事。お互いに彼女や、彼氏がいる中で、それでも不埒なこの告白を、彼はどう捉えていたのだろうか。今となっては、訊く事も出来ない。

\*\*\*\*\*

武道館に着いて真っ先に云われたことは、「思ったより若い！」だった。なんなんだ、と肩を落としたものの、それでも会えたことが嬉しくて、犬だったら尻尾を振って、という形容の一番似合う様子で私は彼の許に駆け寄った。

「わー！会えた！何、思ったより若いって！失礼！」

「おれ、肥えたやろー。」

「写メで見るのとは違う、ねえ確かに。」

「撮り方、撮り方。」

「ほら、これ。」

樹にもらった指輪。と云いながら、私は左の薬指を見せてみた。樹が付き合うということになってから、すぐに送ってくれた指輪だ。私にはぶかぶかだったので、普段は人差し指に嵌めていた。親指ですぐに撫でる事のできる位置だからである。メールで、彼の指にはかぶれが出来たので、(彼曰く、指が呪われた、のだそうだ。)右指に嵌めている、と写真つきでかぶれた指の画像が送られてきた。左薬指の爪だけ青いマニキュアが塗ってあり、他の爪は黒。リアルタイムでメールしながらの画像だという事が判る、駅の構内と思われるタイルが背景にぼんやりと写っていた。それが印象に残っている。

「おれはかぶれたから外した。持ってるけどな、」

ほれ、と云って見せてくれたのは、色違いの黒のユニオンジャックの指輪。私のものは青色である。お揃いやと別れるから色違いにした、と樹は云っていた。高価な指輪をいくつも嵌めている中で、私とおそろいの指輪を嵌めていてくれる、その事実に私は感動していた。小さな事かもしれないが、ただ逢えてこうして隣に座っているだけで、夏の暑ささえ、忘れてしまうのだ。



見入っているうちに、視界から指輪が消えた。彼の指が移動したのだ。ロイヤル オーダーのジッポで、KOOLNIGHTに火を点ける。確か、ジッポを買ったから、と云って、私にヴィヴィアンのライターを送ってくれたのを、まだ覚えている。ちょうど私もその送ってもらったライターを持っていた。自分の煙草を吸っても良かったのだが、なんとなく悪戯がしたかった。

「もーらい、」

「あ、とられた、」

彼が銜えてぼかんとしていた、その唇から煙草を奪うと、私はそれを吸ってみた。ふふ、と微笑んでいると、あーあ、というような素振りをして見せる彼。深い緑色の浴衣に、びっしりと入った墨と、白い肌が映えた。

と、ピンクの浴衣を着た綺麗な人がニコニコしながら此方へ話しかけてきた。私は初対面だが、顔とどういう存在なのかはだけはプリヤ手紙、メール等で知っている。現在の同居人で、樹の元彼女だ。

「こんにちは。……で、どうなん？逢った感想は？」

「どーもこーも……付き合い長いから、なあ、」

「う、うん。」

振られるがままに首を縦に振ってしまった。本当は「嬉しいです！」と云いたかったが、これだけ綺麗な人だったのにいいのかな、などと思うと、口が回らなくなる。

二人は墨を入れるのと、ブリーチで頭皮が痛いのとどちらが痛いかで少し口論をして、「じゃ、邪魔しちゃ悪いから、私あっちにいるね。」と云って、彼女は去っていった。駐車場の少し離れたところに、樹の友達たちがいたのが見えたが、挨拶など出来る体でもない。そんな度胸もなかった。

「あー、喉渴いた。コーヒー飲みてえ。」

「じゃあおつかい行って来るよ！小銭ちょーだい、」

「ん、」

樹は煙草を吸いながら、お財布から小銭を取り出すと、私に渡した。私はそれでコーヒーを買いに行った。生憎ブラックがなかったので、微糖のコーヒーにしたが、それでも満足してもらえたようで少し分けてもらいながら、時間を潰した。

「……長かった、な。」

「うん、」

照れてしまってもうまく話せない。と、携帯が鳴った。メールだった。ごめんね、と手で合図しながら携帯を開いて確認する。

『どこ居るん？今着いたでー』

向こうの方でも、私を呼ぶ声が聞こえる。友人たちだ。

「ごめん、ライブ終わったらまた会おう。絶対だよ、」

「おう、いてら、」

2デイズの一日目、私たちはこうして、会場で逢うことが出来た。

ライブ一日目は、アリーナCブロック。樹たちはスタンド席だったはずだ。見えるかな、と思いながら、久々のライブに思い切り暴れた。

帰りは再会する人たち、荷物受け取りの列、合流する人たちでごった返していた。

「ねえ、彼氏さんいいの？」

「うーん……ごめん、ちょっと探して会ってくる、何処かな、」

その二日間、泊めてくれる友人が気を遣って訊いてくれた。私はくるくると辺りを見渡しながら、人の波に流されるままに出口の方に向かって歩いていった。

「あ、あれじゃない？緑の浴衣って云ってたよね、」

「そうだ！」

見つけた。云い終わるより早く疲れたからだ勝手に駆け出して、樹の腕に飛びついた。

「うわ、」

「見つけた！楽しかったね！」

離せ、と、捕まえた腕を少し振られたが、私はしがみついて離れなかった。

「スタンド楽やったなー。よう見えなかったけどな、」

「あたしちょう暴れた！スカート壊した！」

ペットボトルを提げていたDカンが吹っ飛ぶ勢いで暴れていたのだ。何せ、人が後ろの方で見えているブロックだったので、仕切られている柵ぎりぎりまで出ていた。

「明日、飯でも食うかの。」

「そうだね、」

少し離れたところから友人に呼ばれる。名残惜しかったが、私は腕を離した。

明日も会える。会えるのだけれども……

「じゃあ、お疲れちゃーん。」

今度は届くように、と、樹の頬に唇を少しだけ当てて、走って友人の元に戻った。振り返れなかった。少し高い笑い声が聞こえた。きっと元彼女さんだろう。恥ずかしい、という気持ちよりも、やっと逢えた嬉しさでいっぱいだった。

「よかったねー、」

「うん、ほんとありがと。」

ニヤニヤする友人と、帰りにスーパーに寄って煙草と売れ残ったカツ丼を買って、彼女の部屋にお邪魔して寝かせてもらった。疲れですぐに寝入れると思ったが、なかなか眠れなかった。

翌朝、友人は慣れた様子で出社せねば、といい、準備を始めた。私は油の切れたロボットのようなぎこちない動きで、一緒に食事を済ませると、開場までの時間潰しにと簡単に原宿への行き方を紙に書いて教えてもらった。急遽作ってもらった合鍵を受け取り、友人を見送ると、薬を飲んだり、準備しておいた湿布を張り替えたりして、少し遅れて私も部屋を後にした。

東京は何せ、電車の本数が多い。乗換えなども、私の地元と比べれば問題外の範囲で難しい。軽くパニックを起こしそうになりながら、原宿をぶらぶらした。しかし、一人ではつまらない。穿いていたパンツはあまりに緩かったので、ベルトを二本ほど購入して、それからチャームのついたゴムを買うと、うざったい前髪をくくってしまった。まとめられたピンク色の前髪が酷く滑稽だったが、まあ、これでもいいだろう。一人でロッセリアで時間を潰しながら、つまらないなーと外を眺めていた。紙コップが汗をかいている。

と、携帯が鳴った。樹からのメールだった。短くふざけたいつもの文章の最後に、本日ボーカルさん、と書いてあり、画像が添付されていた。コスプリを思い出すなあ、と思いながら見ていると、立て続けに電話が鳴る。白い目で見られる気がしたので、私は慌ててゴミをまとめて捨てると、竹下通りを後にした。

「今何処居るん？」

「原宿一。つまんないよ、一人じゃ。もう会場向かうのかなーとか思ってるけど……。」

「五反田来い、五反田。飯食うんやろ、」

そこから私が地下道に入ってしまう、電波が途切れ途切れで良く聞こえなかった。

「行き方わかんないよー！電車怖いー！」

「解った解った。じゃあ、俺等も会場行くし、合流するか、」

「ごめんね。」

「ええよー。ほなの、」

会場までは昨日の帰りに目印などを覚えたり、色で分けてある事を教えてもらっていたので何とか行けた。会場に向かうのだろう、同じ匂いのする人たちを何人も見る。最悪、解らなくなったらついて行けばいいや、位にしか考えていなかった。

長い坂道を、ジュースを飲みながら一人登る。たまねぎ、と携帯をカメラ代わりに、会場前の幕も昨日と同じように携帯カメラに収めた。

一人で随分と待つ。昼下がりに、夕方が会場なのに人が多く集まるはずもなく、昨日彼がいた辺りに座り込んで、私はハイライトのメンソールをふかしていた。置き忘れられた缶コーヒーと、ねじ込まれているKOOLNIGHT。少し、笑った。

「何ニヤニヤしてんねん、」

頭上から声が降ってくる。だるそうな顔をした彼と、彼の友達が昨日と同じところを陣取っていた。

「え、あ、ごめん、気づかなかった。」

「ひでえ。」

しかも何やねんこのゴムは、と額をパシッとやられたが、ニヤニヤ笑っておくに留めた。今日の樹は、朝の、多分ホテルで撮ったのだろうと思われる画像と同じでツアーTシャツに同じメイクだった。なんとなく、ヴォーカルとかぶる。まあ、コスしてたもんな、と思い、竹下通りつまんなかった、と云った。

「なあ、昨日浴衣姿見れへんかったし、帰ったら花火でも見にいかへん？名古屋辺りまでなら新幹線で出られるし。」

「ほんとに一！あ、じゃあ探しとく！」

「あんまり人多いのんは行かれへんで。発作出る、」

「そんなこと云ってたら何処も行けないじゃん。」

携帯で花火大会のスケジュールを検索しながら、私は云った。冗談や、と彼も少し、笑う。

「……あ、」

「なに、」

「9月3日に、名古屋で花火あるみたい。それ行こっか。」

「そうなん、」

なんとなく、いいなあと思いながら、私は浴衣のことを考えていた。着て来れば良かったのか、でも、花火を見に行く、という提案が彼から出てきた。それなら良かったと思える。

他の友達と話に行ったり、彼もちよろちよろ散歩してきたり話したりしているうちに、アリーナの方が整理番号順に呼ばれていた。

「済まん、俺等今日アリーナやから行かんと。後でな、」

「うん。いってらっしゃーい。」

しゃがみこんでいた私の頭を軽く二回、ぽんぽんと叩いて樹たちはアリーナの列に消えていった。

私はぎりぎりまでスタンド席に入らず、友人を待ったが、間に合わなくなると云うので先に入った。幸い、チケットは渡してある。ライブ中メンバーは機材で見えず、友人は前の椅子に転がり落ち、私は階段に転がり落ちながらも、全力で暴れてきた。久し振りに、幸せだと思えた。

帰りに友人たちに会い、また会場で仲良くなった友人と一緒にそのまま打ち上げのようなものを焼肉屋と、追い出されてカラオケで執り行ったため、樹とは逢えなかった。

アリーナの列に並んでいた後姿。それが、最後に見た姿になるなんて。

燃える様な夕焼け。車窓から、お土産と荷物を抱えて、私はぼんやりとそれを見ていた。

短いようで長かったような、今となっては現実感のないあの二日間。彼とメールしているうちに携帯の充電が切れそうになって、私はそれを告げる文面を打つと、イヤフォンから流れてくる音楽に集中した。

自宅に着く頃には、きっと夜も更けるだろう。少しの秋風を感じながら、私は自宅の最寄り駅で電車を降りた。

次は、名古屋の花火大会で。

少しにやけて、車に乗り込む。母親が迎えに来ていた。

「楽しかった？」

「うん、彼氏とも会えたし、」

「良かったね。まあ、これからは無駄遣いしないようにしなさい、」

「うん、」

名古屋の花火大会で会うこと、それも告げると、そう、と云ったぎり母親は運転に集中した。私も黙って音楽を聴く。ライブでかかった曲が流れたとたん、涙が溢れた。

――逢いたい、一秒でも早く、逢いたい。

帰宅して電源コードに携帯を繋ぐと早速メールを打つ。すると、返信より先に電話がかかってきた。

「もしもし、あ、お前か、」

「うん、誰の携帯にかけてるのよ、」

「せやな。あの、」

「ん？」

「花火、行けんようになった。仕事入っとる、」

「え……あ、じゃあ仕方ないね、他の日探してみるよ。」

「済まんの。」

「ううん、いいの、仕事じゃ仕方ないよ。」

じゃあね、の代わりに云ってみた。

「……愛してるよ、」

「……………愛してる、よ。」

ぶっきらぼうに、それまでの印象からは想像もしない答えが返ってきた。私たちはそれからくすくすと笑って、またね、と電話を切った。

それから連日、彼は電話をかけてきた。仕事が生んどくて帰る途中、今タクシー乗ってる、あ、おつり……などと、運転手と話しているのが聞こえた。

「済まん、おれ今、なんか客に気に入られてんね。どっかの部長らしいんやけど。」

「うん……。」

それからの通話記録よりも、メッセージでやり取りした記憶が多い。もう薄れてしまった記憶、あの頃私たちは何を話し合っていたのだろう。友人も紹介してもらった。

秋が過ぎて、花火の季節が終わる。連絡が途絶えたと思ったその頃、彼の日記を読んだ。かなり大きい腫瘍が出来ていて、取らないことには良性か悪性かも判らないそう。心配してメールしてみるものの、返信もない。仕事の時間も不規則なので、こちらから電話をすることは憚られた。一度だけかけてみたが、彼は電話を取らなかったの、着信履歴だけを残すのみとなった。

親友からある日、レイトショーで映画を見に行かないかと誘われた。休職中だった私に、次の日の予定などあるわけがなく、行くよ、とメールして支度した。

ピンク色に染めた前髪はもうすっかりマニキュアが落ちて金髪に変わっていた。不揃いな前髪が、気分を苛立たせる。あらかた準備が終わったところで、親友から到着メールが来た。抹茶色の助手席に乗り込むと、夜の街へと車が滑り出した。

映画館に着いてチケットとポップコーン、ドリンクのセットを買う。平日だけあって、空いていた。

と。

マナーモードにしていた携帯が鳴る。樹からのメールだった。

「大事な話があるんやけど。」

なんだろう。厭な予感が背筋を走った。

「なにー？」

努めて明るく返す。数分躊躇うかのように携帯は沈黙していた。

「嫌いとかやないんやけど、

友達に戻りませんか？」

一瞬、文面の意味の理解が遅れた。フライパンで頭を殴られたような気分だった。

「どうしたの、」

親友が無邪気に話しかけてくる。その無邪気さが逆に有難かった。私は答えずにメールを返す。

「何で？」

「今は頭がごちゃごちゃしてて云われへん。」

「じゃあ、後で訊くから……。今から映画見てくる。」

返信はなかった。

「ねえ、ちょっと、どうしたの？」

「樹が、友達に戻ろう、って……。」

親友はこういうとき、どんな顔をすればいいのか解ってくれていた。軽く涙ぐむ私に、ポップコーンを持たせると、チケット！と云いながらチケットを渡してくる。

「今日、ちょっと飲んでこっか。」

「……うん、」

私は笑った。口角が引きつるのも、自覚していながら。無論、映画の内容など頭に入るはずもなく、嗚咽さえも殺してただ、泣いていた。もう一番じゃない、何かしただろうか、愛していると、云ってくれたのに。

映画が終わって失恋すると必ずと云っていいほど立ち寄るバーに寄った。代行の時間まで無理やり飲んで、ただそれを忘れたかった。

以降数日、携帯を枕の下に埋めたまま私は過ごした。かといって、彼以外に私の携帯を鳴らす人もほぼいない。メールも電話も、彼だけ着信の設定を変えてあるので、彼からの連絡だったら判る。

物分りのいいふりが、私に続くはずもない。数日後、発作的に、爆発したように樹に電話をかけた。

「もしもし、」

「ねえ、何で？何で、友達に戻るの？あたしのこと嫌いになった？」

「……日記読んだやろ。それに、」

「……、」

彼は少しややこしい問題を抱えていた。生物学としての性別と心の性別が一致しないというあれである。私はだから、いつもの口癖だった一人称「おれ、僕」を引っ込めて彼の前では「あたし」と云っていた。態とではなく、自然にそうなる。

「お前と一緒に居ると、どうしても自分が体女やって思い知らされる。それが、辛い。」

「そっか……。」

少しの知識は私にもある。私の場合は性別云々よりも、どちらでもない、といった方が正しい。気持ちがわからなくもなかった。

「そっか、それじゃ、仕方ない、よね。ごめん。」

「ごめんな。ほなの、」

「……待って、」

伝えなくては。涙声を自覚して云った。

「愛してる、」

「……愛してるよ。ごめんな、こんなんです。」

初めて自分から通話を切った。久し振りに、声を上げて私は泣いた。





彼を思い出すときはいつだって横顔だった。面と向かって話したのは、数えるほどしかないだろう。細く、ひよろりと伸びた少し猫背気味の背中。長い腕。アクセサリは過多なほどだったが、彼にはしっかりと来る。そしていつも、何処のものかは判らない香水の香り。ラフな格好でも、その香りの配分は上品だった。

「お待たせ、」

「ああ、今から煙草吸おうとしてたのに、」

「歩きながら吸えばいいじゃん。」

「歩き煙草は性に合わないんだよ。」

「そう、」

ふ、と口角だけ吊り上げて笑う。彼はいつもそんな笑い方をした。大笑いしたり、顔をくしゃくしゃにして、と云う形容は到底似合わない、少しだけの、冷笑にも似た微笑。僕はそれを見かけるたびに、何だかとても嬉しくなった。

秋が押し迫ってくる季節だった。残暑は厳しいが、いつものカフェからカラオケの後、秋服を見に行きたい、と街中を一緒に買い物に出かけることになった。モール街を進んだところの、小さなお店に僕らは連れ立って入った。

ベストを二着持ってきて、鏡の前で迷っている。やがて首を傾げながら、適当に服を物色している僕のところにやってきた彼はうーん、と唸った。

「どっちがいいと思う、」

「どっちも似合うと思うけど、……うーん、緑のほうかな。チェック可愛い。」

「だよ。じゃあこれにしよう。」

振り返り様の目を細めた笑顔。カウンターで店員さんと話しこんでいる。僕は先に店を出て煙草を吸っていた。

「此処さあ、僕、前に働いてたんだよね、」

「そうなんだ、」

「何か、懐かしくってね。」

服装には気を配る彼だ。アパレル関係の販売は何件も経験があるようで、よく日記に仕事の様子を書いてきた。飄々として人事のような、彼の日記。どんな気持ちで書いていたのだろう。

今となっては、知る事も出来ない。

薬局の匂いと薬瓶の入った紙袋。鞆にぶら下がった不釣り合いなマスコット、時々かぶる煙草の銘柄。総て彼を思い出す要素で、涙の成分に似ている。市販の気管支拡張剤をサプリメントのように大量に飲みながら、歌ったり歌わなかったりのカラオケ。共通で好きな曲はどちらかがコーラスになったりハモったりもしていた。彼はコーラばかり飲む。僕は炭酸は苦手だった。煙草を吸いながら、時々トランキライザーを齧りながら。切らしていたり忘れていたりすれば分けあ

った。

「……ねえ、」

「何、」

「何でそこで止めるかな。最後まで歌おうよ。」

「飽きるんだよね。喉の調子も悪いし。」

彼はだるそうに云って、ブラックストーンのチェリーを灰皿にねじつけた。薄い舌がするっと、彼の唇の上を横切った。

「最初はブラスト、すぐくまずいんだけどさ、慣れてくるとうまいんだよね、これが。」

「きついじゃん。」

ハハ、と彼は笑った。それまで見たことのない笑顔。思い出すのはいつも笑顔、で。

この日カラオケに来たのは、彼が昨夜泣きながら電話を寄越したからだった。助けて、と途切れ途切れに訴える涙声に、明日まで我慢してくれと必死に頼んだ。もう薬を飲んで寝てくれ、とも云った。

「明日遊ぼうよ。話聴くよ。」

「……うん、でも、」

「明日まで待って。頼むから。会いに行くから、」

「わかった……。」

お休み、と通話終了ボタンを押す。心配で此方が眠れなかった。

そこまで必死で、いつも目で追っていたのは横顔だった。厭世的な歌を、飛び出しそうな歌を、たまに、とてもくだらない歌を歌う彼。足癖が悪く、ソファだろうが机だろうが土足で座ってしまう。

「あの一。元気出たの、ちょっとは、」

札を云ってグラスを受け取ると、ドリンクをもってきてくれた彼に問うた。

「あー……うん。昨日、ごめんね。」

「いいよ。でも、吃驚するから、あんまり頻繁だと困る、」

「ごめんって。」

顔も見ないで適当に謝る。それでもリモコンを渡してくる辺り、彼なりの心遣いなのだろう。

「あ。」

「何、」

「もうすぐ誕生日だっけ。プレゼント、用意してあるけど、遊べる、」

「今日じゃないのかよ、」

「持って来ようと思ったけど忘れた。」

「呆れるね、」

散々喉を、主に煙草で傷めてから僕等はカラオケを後にした。時間も遅いので、とそれぞれの駅の前で別れた。

秋風がだんだんと体に染み入る頃だった。カーディガンの前を合わせて電車に乗り込む。人影は疎らで、難なく座れた。10分少々の乗車で僕は目的の駅に着く。帰宅してから僕は彼に必ずメ

ールを一通送っていた。返信は特に求めている。返信がある時は極まって調子が優れないときだった。

僕は彼と遊ぶのが楽しかったし、一緒に遊べる友達がいることに安堵した。彼はフォークの先で数えるほどしか友達なんていない、といていたが、その中に僕も含まれていたろうか。含まれていたと信じたい。

彼と疎遠になりだしたのは、ぼくも親交のある彼の彼女から彼に対するよくない噂を聴いてからだ。メールに返信しないようになったり、電話にも出ないようになったり。

誕生日のプレゼントを渡したい、と彼が云っていたので、その日会う約束は守った。だが、僕は正直、彼を心の中で見限ってしまっていた。今日会ったらもう、会わずにおこう。療養に来ているはずなのに、遊んでばかりじゃないか。彼女が怒るのも無理はない。

バスを降りてターミナルを歩きながら、僕は彼女にメールした。もうこれきり会わないことにするよ——返信はなくとも、読んでくれていただろう。しかし僕は彼を見つけると、普通の「友達」に接する態度と感情に戻ってしまっていた。尤も、完全にとは行かないが。

「今日さ、新しいところ行かない。すごくお勧めのカフェあるんだよね、」

「へえ、いいな。」

「抹茶のパフェがうまいよ。」

コンクリートが打ちっぱなしのような外観のビルの二階の扉をそっと開ける。店内は静かな音楽が流れていた。僕等は喫煙席のカウンターに並んで座ると、其々注文をした。といっても、メニューは同じだったが。

「あ、これ、今日の本題ね。」

彼は木の箱を取り出した。通例ならばジッポが入っている化粧箱だ。

「僕のコレクションから、いくつかあげるよ。結構ごつめのアクセ好きでしょ、」

「良くご存知で、」

サイズは、手の大きい彼の私物と云うこともあってどれもぶかぶかだったが、僕は早速指輪をはめてみた。中指でも少しゆるい、オニキスのついたシルバーのリングを一等気に入った。他にも、銀のロザリオやコーラルのブレスレット、ちりちりと音の鳴る鈴のピアスなど。自分でブレスレットをつけられないのを見かねて、彼がうまい具合につけてくれた。

「ほんとにいいの。」

「いいよ、僕、他にもお気に入りたくさんあるし。」

ふむ、と溜め息をついて彼は白玉を口に運んだ。

「おいしいよね。値段だけの事はある、」

僕がそういうと、彼はパフェを崩しながらふ、と笑った。溜息のような笑み。もぐもぐと口を動かしてから白玉を飲み込むと、彼は二本目の煙草に火をつけた。

「買い物しない。今日はちょっとゆっくりしたい気分、」

紫煙を吐き出しながら彼はぼんやりと云った。了解すると、点けたばかりの煙草を消してしまう。

「行こう。」

「うん、」

秋服を買ったのと同じ通りのシルバーアクセサリ屋さんで、ピンキーリングを物色していると、これがいいんじゃない、といって彼はシンプルなリングを選ばると、買ってプレゼントしてくれた。

「左の小指に嵌めるんだよ。そうすると、幸運が逃げない。」

「それにしても指輪とか、いいのかなあ……一応既婚者でしょ、」

「誕生日プレゼントだもん、悪いことしてるつもりは全くないけど、」

「ならいいけど、」

途中おもちゃ屋さんに寄った。僕はゲームなどを見ていたのだが、あまり興味がない。うろろろと広い店内を回ると、彼はプラモデルの前でしゃがみこんでしまった。

「大丈夫、」

「いや、これとこれ、どっちにしようかな、って思ってさ。」

二つのプラモデルの箱を持って真剣に考え込んでいる。

「僕、ガチャポンやってるね。早く決めなよ、」

返答すらない。僕はさっさとその場を後にすると、一度目にレバーを回した。出てきたのはお目当てのものではない。げんなりしていると、どちらのプラモデルにするか決めたのだろう、大きな包みを抱えて嬉しそうに彼がやってきた。

「何してんの、」

「ガチャポンで遊んでるって云ったじゃん。」

「はずれ中のはずれじゃん。一回僕もやってみるよ、」

二回目のレバーは幸運の味方だった。あげる、と云って、彼はカプセルごとそれを僕にくれた。

「なんか、今日貰ってばかりだよなあ。」

「いいんじゃないの、」

ボタンを押すとコインを獲得したときの音の鳴るおもちゃで、人の動きに合わせて音を鳴らして悪戯している彼は僕に目もくれずにそういった。そう、なんでもないことのように。

久し振りに、プリントシールの機械で遊んだ。このときは気付かなかったことがあった。半分に分けて、また服を見にうろろろして、マクドナルドで空いた小腹を慰めた。

「自動車学校、結構大変でさ。」

コーラをすすりながら彼は云う。

「でも、早く免許取って家族でドライブ行きたいよ。」

少し照れくさそうにわらう。とても悪い噂の中心人物には思えなかった。カードで買い物をしているところも、実はこっそり彼女にメールで報告していたのだが、お節介だったかな、とも思う。そのくらい優しい笑顔だった。

僕等はいつものように手も振らずに別れて、帰宅した。

僕がこの日違ったのは、彼に家に着いた旨のメールを送らなかったことだろう。

それ以降、僕は彼からのメールに返信しなかった。電話も、携帯と実家の番号を着信拒否した。泣きながら助けて、と叫ぶ彼の声をもう聴かないでいい反面、少しだけ、ほんの少しだけ心配だった。

彼が亡くなったと知ったのは、僕が体調を崩して入院し、退院してからあけて二日としないときだった。彼女の日記を読んで、知った。

飛び降り自殺だったそうだ。

彼女にメールした。返信はずっと後になってからだった。待っている間も、日常生活でも、実感があまりにもなくて涙も出てこなかった。

そんな折、友人から手紙が届いた。プリントシールが同封されていたので、それを収集しているノートを開く。最後の頁には、最後に撮って貼ったシールが勿論あるのだが、それが、彼だった。

見たこともないくらい、楽しそうに笑っている一枚。日付のスタンプは最後に会った、誕生日プレゼントをいっぱい貰った日だった。

「これもくれたんだ、」

笑っている。

「こんなに、笑ってくれてたんだ――」

ぽた、と涙が落ちる。シールが貼ってある紙はただのノート用紙だ。みるみるうちに皺になる。水玉の染みは奇妙な模様を作った。

彼は、普段彼女の前外では滅多に笑わないのだそうだ。それは僕も知っていた。三人で遊んでいた頃も、彼はほぼ無表情だった。機嫌が悪いわけではない。仲の良い二人はすごく眩しかった。

二人のアパートに遊びに行った時のこと、手を繋ぐ二人、結婚するんだ、と、嬉しそうに指輪の写真を見せてくれた彼、子供が生まれたよ、と写真つきでメールを送ってくれた彼、家族三人で態々会いに来てくれて、彼女にも久々に会えたときのこと、色々な記憶が色とりどりで涙と一緒に溢れ出してくる。

笑いたかった。もっと。助けてあげれば良かった。あの二人が、僕にとっては理想で、自慢できる友達だったから。彼も、彼女も勿論。

彼は僕の近くに住む、唯一の男友達だったのに。何の差別も偏見もなく、僕と云う「人間」を見てくれていたのだと、そう思っていたのに、何故助けてと云われていたのに振り切ったのだろうか。

彼が亡くなって数年が経とうとしている。写真の彼は、記憶の中の彼は、まだ、笑っている。笑った顔しか、思い出せなかった。

海沿いの私の住む地域には切りつけるような横殴りの冷たい雨が降っていた。もうとんとんと、冬の足音も聞こえる。腫瘍の手術を控えていた樹に最後のメールを送信した。

最後にする気は毛頭なかったのだが、私さえいなくなれば、消えてしまえば、という気持ちから何かに怯える様に「元彼とよりを戻したから、私のこと忘れて。ごめん、」と、返信不要の旨を添えて送った。

勿論嘘である。でもそうでもしなければ、彼は私を困らせないようにとまだ苦しむだろう。

その日、彼の日記を読んだ。一言、鵜呑みにしたおれがバカだったんやな、と書いてあった。背筋を悪寒のようなものが走ったが、それ以降彼の日記を私は読めなかった。

どんな気持ちだったんだろう。性別適合手術を受けるための検査をパスして、「仕事心底厭やけど、働かなあかんねん。まあ頑張るわ。」メールの文面からは、自分らしくあれることについて喜んでいる様子を私は受けていた。仕事については、男性としてある彼からしたら苦手分野ではないが、融通してくれる人がいるのだという。とにかく手術に際して資金繰りが必要なので、無理をすることにはなる、ということは不安そうに云っていた。

照れくさそうな「愛してる、よ。」を振り払いながら、遊び歩いて、家に帰りもせず、声をかけられるままに夜の仕事に就いた。誘われれば誰にでもついていった。ぼんやりと響く誰かの「好きだよ。」に流される。触れるたびに、ああ、樹ってどんな指していたっけ、声は？香水は？白い右腕に留まった青い蝶を思い出す。

どの人の腕にも青い蝶はいないし、絡まる舌にも金属の感触はない。――そういえばキスもしてなかったな。

夜の底で身も心も磨り減った冷たい冬を越え、魂の抜けたように年越しを過ごした。6月。メッセージのオフラインメッセージで一言、樹が死んだ、と友人からメッセージが残されていた。翌日は仕事だった。悪い冗談だろう――そう思いながら多めに睡眠薬を流し込む。

嘘ではなかったそのメッセージ。数日後、メッセージで友人から葬儀の様子を説明された。聞きたくない、と泣く私に、知る義務があるでしょう、と友人はやさしく、強く諭した。

薬指に刻まれたトライバル、私のイニシャル、柩からみんな泣いて離れなかったよ、愛されてたんだね――モニターを流れていく文字が涙で滲んだ。

まだ残っている連絡先、オフラインのままの表示、既に幾年も経つ。冷たい雨の季節になると、彼の最期の気持ちを想像して、缶珈琲を買うのだった。酷く鮮明な夏の思い出が、空梅雨を超えてやってくる。空が崩れてしまえばいいとさえ思った。

飛び降り自殺だったのだそう。耳にまだ、残るあの最後に聞いた「愛してるよ。」がピアノ線のように心臓を締め上げる。こみ上げてくるものはいつだって嗚咽だった。

## I couldn't say anything.

---

半身浴のお供にとプレイヤー代わりにしていた携帯に着信があった。折悪しく今から浴槽を上がって脱衣所で体を拭こうとしていたところだ。半身浴中ならば、時間を延長して汗をかきながらの通話も出来る。しかし、それが既になかなわないほどに私はのぼせてしまっていた。しかも、この番号。アドレス帳登録外ではあるが、すっかり見慣れた番号だ。

彼女には、私の番号は教えてあった――元々、番号を暫く変えていない――が、端末のアドレスは教えていなかった。何かしらにつけて電話をしてくるが、その度にアドレスを教えろとせがまれる。寧ろ何がしかの理由をつけてアドレスを聞き出そうと必死になっているのが、最近顕著だった。こういうときにアドレスを教えようものなら、大抵、不調を訴える長文が送信されてきて、それを讀んだ私も同時にすっかり気が滅入ってしまう。数年前、恋人だった彼女の傍迷惑な悪癖を私はまだ覚えている。

携帯をスライドさせた。音声着信時はキーロックも関係なしに繋がる。私は浴室から脱衣所に移りながら、タオルをとって顔と髪を拭きながら、通話相手につけつけと言いつつ放った。

「ごめん、今風呂。体拭いてなんか着るから、かけなおして。」

かしゅん、とスライドを元に戻して一方的に通話を切る。向こうで昔の通り名で私を呼ばれたが、その名前にあまりいい思い出がない。正直、迷惑だと云ってもよかった。

部屋に戻る前にグラスに水を汲んで、鏡の前でビタミン剤と睡眠薬を飲んだ。つけたままのパソコンから、通話相手の生活音と、垂れ流しになっているプレイリストが混ざり合って聞こえていた。着替え終わって、マイクをミュートすることを通話相手に伝えようと思ったところでまた着信。彼女はいつも、見計らったようにタイミングが悪い。

「さっきお風呂って、ケータイ変えたの、」

「防水のにしたけど操作性がいまいち、あとデザインも。でも番号は変わってないだろ。それから、もうその名前じゃないから。」

で、何。コットンに拭き取り化粧水を染み込ませて顔を拭きながら問うと、彼女は若干声のトーンを落とした。

「明日、朝一で東京来て。」

「またそれか。あいにくおれは現在もメンヘラでニートですよ悪かったな。」

「交通費は支給するよ。」

「残念。片道分も持ち合わせがなくてね、」

「.....じゃあ、」

一瞬の沈黙の後、彼女は云った。

「片道分でも持ち合わせがあったら、来てくれた?.....会いたいの、」

私は黙った。スプレーボトルに詰め替えたプレ化粧水を顔に何度か吹きかけて、右手でハンドプレスする。左半分、顔が隠れてうまく手入れが行き届かない。やり直しを覚悟した頃に、彼女がまくし立てるように話した。

「今月末ね、あたし結婚するの。もう、お腹に赤ちゃんもいる。前云ってた人。でもね、不安なの、あの人優しくないし、」

「あら、おめでとう。……んで、おれがいつ優しかったよ？かいかぶりすぎ。大体、結婚するとか、そういうのは手紙でも寄越せよ。まあ、今月末だとかそう唐突に云い出すんじゃおれを勘定にも入れてないだろうし、おれも式には出席は出来ないんだろうけど。」

うん、としよげた声が受話口から聞こえた。大抵、こういうとき、彼女は下を向いて唇をかんでいる。

「……学校サボって会いに来てくれたじゃない。あたしが切っちゃったときも、手当てしてくれた。泣いてたら、目立たないとこまで連れてって来て、キスしてくれた。色々一緒になって考えてくれたじゃん。」

「それは事実だねえ。」

「あの人それがないの。……赤ちゃんだって、育てられる自信ないよ。相変わらず、うち、家の人と仲悪いし。」

ふうん、と話には大して関心もなく私が云うと、彼女は大いに憤慨したようだった。

「あたしのことが心配じゃないの？退行繰り返してるのも、自傷してるのも、まだやめれてないのに、」

「……、」

私は敢えて彼女を本名で呼んだ。彼女だって、私の本名は知っている。

「あの時私は学校サボって会いに云ったよ。傷の手当もしたし、キスだってしたよ。好きだったから。でもそれを、彼女が出来ました、これからは友達でいましょう、って云ったの、お前じゃなかったっけ」

黙る彼女に、私は続けた。

「偶然長野のライブで会って、そのとき彼女さんも紹介してくれて。そこで連絡もうしないって云いながら、番号変える度に電話してきて。彼氏出来たの別れたのって、友達だから聞いていられたよ。今は私もお付き合いしてくれてる人がいる。男の人。でもお前さ、結婚するんでしょ？育てられる自信ないのに赤ちゃんいるってどういうことかわかってんの？それ、誰に向かって云ってんの？」

「……ごめんなさい、」

私たちの間で、特に私の身の上に起きた事故のために、子供の話はタブーだった。それを彼女も判っていた筈だった。

「ビアンだとかなんだとか云って、結局性指向は普通の女の子なんだよ。そこが違ったから、おれらやっていけなくなったんでしょ？」

「でも、」

「今更会いに来てとは、虫が良すぎるよ。……もう、エマはお嫁さんで、おれはりくじゃなくて私、だ。お互い誰かの大切な人なんだよ、」

そうだよ。そう答えた彼女の声は震えていた。

「幸せになって。電話なら、起きてて、話せる状態ならまた出るから。」



「アドレス教えてよ、」

「厭だ。……じゃ、彼氏待たせてるから、」

うん、と、彼女は溜め息をついた。もう、何年も姿を見ていないが、子供っぽい拗ねた声も、随分と柔らかくなった。

「お休み。寒いから、暖かくして寝るように、」

「うん。お休み、」

それ以外何も云えなかった。あの時とまったく同じ科白で、トーンの全く違う切り際の科白。彼女が電話をしてくることは、きともう、ないだろうと私はどこかで思っていた。

## ヒトリゴト

---

結露が出来た窓ガラスに指でイニシャルを書いた。水滴は混じり合って涙のように流れていく。これも意味のないことだった。

「……でさ、」

「うん。」

「結局行き違いだったのか、本当にもうだめなのか、って話だったっけ。」

「ああ、それ、」

あたしは髪のを指で弄びながら彼から視線を外した。

「今出さなきゃなんない答えなの。」

「じゃなきゃなんでこんなクソ寒い中話してんの、車ん中で一時間も。」

「――そう、だよな、」

情けない笑いがあたしの口端からこぼれた。

「話したとおりで、あんたはあたしにむかついて、あたしもあんたの態度にむかついてる。でも、」

「でも、何。」

「……悔しいよ。好きなんだよ。」

「今回はごめん悪かった、もう仲直りしよう、じゃ済まないのはわかってんだろ、」

あたしは彼の車が禁煙車だと知っていて細巻のメンソールに火をつけた。携帯灰皿を見せ付けるようにちらつかせて、窓を少し開ける。

「寒い、」

「全部あんたがやらかしたことじゃん。発端はあたしじゃないじゃん。なのに何悲劇のヒーローぶってるわけ？自分がそんなにかわいそうで、はいはいよちよち大変でちたねーなんて、あたしがすると思ってんの。あきれた。」

「してくれるなんて、思ってない。」

「思わせぶりに怒っというてそれか。」

「この話は3回目だ。」

「こっちが下手に出たら何？ごめんね、って。馬鹿じゃないの。」

あたしは黙るべきだった。もう何度も繰り返しこの話をするべきじゃなかった。行き違いがさらに深い傷を生むだけだなんて、疾うに分かっていた事だったのだ。

あたしが男友達に彼のことを相談しているのを浮気と勘違いされたのが随分前。あたしはいつもそんなつもりは毛頭ないし、本当に彼について相談しているだけだった。交友関係は狭くないので、酒の席でフランクに話し合える友達もいる。彼もそれをわかっていたはずだった。

彼が仕事のことで悩んでいる――それが、立場の違うあたしにはわからないことだった。できることはないかとあたしなりに慰めたり、頑張っってねと言ったり。まあ、よく言う月並みなことしか出来なかった。それが癩に触ったのか、人の気も知らないで、だとか彼は怒り始めた。話せ

ば分かる人だから、きちんとあたしに出来ることがこれだけだったというのも告げて謝ったが、彼の怒りは収まらない様子だった。もともと神経質な人だ。それは分かっている。一時の情に任せて離れたくない人だということも、分かっている。分かっているのに――

「送るよ。もう遅いし、おれは明日も仕事だし、煙草にも付き合えない。」

「話が済んでないじゃん、」

「もう付き合えない、って今言った。」

「……は、」

危うく煙草を取り落とすところだった。

「何で、」

「他の男と話ばかりしてるし、別に僕じゃなくてもいいんだろう？仕事のことも、他のことも、もっと優しくしてくれる人も、お前にはきつといるよ。怒りっぽくてお前の言うこといちいち癢に触って逆切れしてむかついてる僕じゃなくてもね。」

彼は車を出した。

「ちょっと待ってよ、そういうところが気に食わないんだよ。やり方が間違ってるならどうしてほしいとか言ってよ。ほっとけないのに、どうして何もさせてくれないのよ、」

彼は答えない。

「煙草吸い終わったら、窓閉めて、」

「ねえ、何で……。」

後は声にならなかった。わたしは窓を閉めて、携帯灰皿に煙草をねじ込んだ。涙が止まらなかった。

自分の部屋のあるマンションの前でおろされた。部屋までいつも送ってくれる彼は、そのまま帰っていった。合鍵を返して。

「ただいま、」

この挨拶は独り言となり、意味のないものになった。

暦の上では春とはいえ、2月の夕方に吹く風は冷たい。わたしは暖房を利かせた部屋から、失敗したフォンダンショコラを持つと意を決して外に出た。びゅう、と冷たい風が頬を切るようにかすめてゆく。

「これ、どうしようかなあ。今更市販のものとかいやだしなあ……。」

小さく独り言を云ってみる。それでこの、苦すぎるショコラの味が変わるはずもなかった。

糖分の量を考えて、だいぶ苦いチョコを使用して作ったショコラは結局、その糖分不足が命取りとなって、食感も味もひどいものになった。味見をしたのだから間違いない。パッケージも、カードも、凝ったものを用意しただけに、材料の一部を換えただけで練習して成功したものが失敗になるとは思わなかった私に、その苦味は破綻さえ予感させた。

作ったことに意義がある、と言い聞かせていると、駅まで送ると云った母親が早く車に乗るように促してきた。頷いて車に乗り込むと、母親はおいしそうじゃん、と云ってきた。

「ところが大失敗なんだよ、すごく苦くてさ。カカオ80%のチョコで作ったらこんなに苦くなった。マジあり得ないよ、」

「土壇場で作るあんたが悪いんでしょうが。」

「でもお父さんにあげたやつはとろーってしてたじゃん？砂糖の量が足りなかったみたい。」

「練習不足だったね、」

わたしはうなだれた。

「そうだねえ……。」

帰りの時間や送迎のお願いなどをしているうちに、駅に着く。有難う、と車を降りて、帰りの時間を伝えると、母の車は走り去って行った。時間は17時。彼の仕事が終わる時間だ。改札のある2階まで階段を上りながら、携帯を取り出してお疲れ様、といつものメールを打って送信した。

電車は帰宅ラッシュ時間に反して空いていた。難なく座ると、目的の駅までわたしは失敗したフォンダンショコラの心配ばかりをしていた。幻滅されたらどうしよう……。そんな考えばかりが頭をよぎる。うーんうーんと唸っているうちに、電車は目的の駅に普段通りに着いてしまう。

駅の北口で、仕事を終えて向かってくれる彼を待った。寒さで指がかじかむ。買ってもらったレース襟の赤いワンピースも、内巻きにした前髪も、全部うまくいったのに、メインのお菓子がだめなのだ。どんよりしていると、メールが届いた。

『もうすぐ着くよー！待たせてごめん><』

『大丈夫！』

慌てて返して見上げてみたら、彼がニコニコして立っていた。

「お待たせ、」

「あ、大丈夫だよー！お仕事お疲れさまね！」

「ううん、」

行こうか、と彼が云って、わたしたちは連れ立って歩き始めた。まず夕飯を食べに、二人とも

大好きなオムライスの店に入った。窓際の席に座る。注文をすると、やっと心地ついた。

「で。これ……なんだけど……」

ずっとぶら下げていた紙袋を渡す。云わなくては。

「失敗しちゃったんだけど、これ……。あの、これからももしよければ、……付き合ってください。」

やや間があって、彼が照れくさそうに、はい、と答えた。開けていい、というので、びくびくしながらうん、と答えた。

開けた彼も嬉しそうだった。食べてからが地獄なんだよ……そう思いながらその様子を見守る。

「ありがとね、ほんと、」

「うん、でも……失敗しちゃったから、アイスクリームとかと一緒に食べてね、」

「気持ちが嬉しいんだよ。……オムライス来たー、」

キムチも食べられるようになった私が頼んだのが牡蠣のオムライス。そこからは談笑しながら楽しい時間を過ごした。

「来年、ね。」

「え、」

「来年リベンジしてくれたらいいよ、」

牡蠣を噛み切ってからうん、と頷く。それは――笑顔に変わった。

「来年ね、」

「うん、来年。」

そんな言葉をくれた彼の期待を裏切らないように、今でも時々家で練習をしている。

かすかな携帯の着信音と振動。わたしはまどろみから一気に浮上して携帯をとった。深夜にし  
か連絡してこなくなった彼が珍しく20時台に、メールではなく電話だ。何の話かとおそろおそろ  
通話ボタンを押す。

「も、もしもし……」

「どうしたの、寝てた？相変わらず君はだらしないね、こんな時間から寝てるなんて。僕はまだ仕  
事だよ、」

「仕事……、あ、出張だっけ、」

「そう、埼玉来てる。いやになっちゃうね、人使いが荒い部署は。」

「ほんとに部署移動なのか怪しいんだけどな、」

「嘘をついてどうするんだい。」

いつもの調子で人をからかう彼の口調に安心してか、やっとなら私からも嫌味が出た。

「会いにこない口実でしょ。」

「本当に忙しいの。で、今、その忙しい合間を縫って君に電話してあげてるわけ。ありがたい  
でしょ？」

「うん、まあ、……ねえ。最近メールばかりだったし。」

「素直な子は好きだよ。」

私は口を尖らせた。尤も、そんなことをしても彼に見えるはずもないのだが。

つい二日ほど前、出張の準備をしている、とメールがあり、どこに行くのか訊いたら埼玉だ  
と言っていた彼は東京にいる。尤も、ネットで知り合った仲で、擬似恋愛と云っても過言では  
ない。会った事すらないのだから。

それでもその設定を楽しんでいた私は、悪戯を思いついた。ほんの少し寂しかった、というの  
もある。次に彼が話し出したところからこの通話を録音してやろうと思ったのだ。自分の声は録  
音されない。時々聞き返して不安が安らげば、との作戦だった。

「体調とか崩してない？ここのところ徹夜とか夜遅くまでとかだったみたいだし、」

録音ボタンを押したとたんに嫌味が発せられた。

「君と違って自己管理は出来てますから。」

「あーあーメンヘラでごめんなさいね。」

「自己卑下はよくありませんよ。」

この人は場にそぐわない敬語を多用する癖がある。

「今もぼけーっと寝ようとしてたし、済みませーん。」

わたしが嘸くと、彼は笑った。

「ちょっと、笑いすぎじゃない？」

「いや、可愛いなと思って。」

暫く小さく笑っていた彼は大きく息を吸って呼吸を整えると、思いもしないことを言った。

「……愛してるよ。」

「……は、」

そこで通話録音が限界を迎えた。なんと言うか、わたしも限界だった。

「本当はそれが言いたくて抜け出してきて寒い中電話したんだよね。まあ、そういうことで、ご多忙な僕は仕事に戻ります。」

「待ってよ、」

「待ちません。また、電話するから。いい子でね、」

じゃあ、と云って彼は通話を切る。毎度、電話ではこの調子だった。子ども扱い、自己管理が甘い、努力しないと散々言われているものの、結局は言いくるめられてしまう。

私は今夜の分の薬を服用すると、ベッドにもぐりこんだ。何度も先ほどの電話の録音を再生したのは、言うまでもない。

## 中距離恋愛

<http://p.booklog.jp/book/20601>

著者：凜音

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rinne-a/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20601>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20601>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.